

5月25日(金) 13:30~15:00 九州大学50周年記念講堂

彼岸と表象—仏教美術の機能についての基礎的考察

東北大学 長岡 龍作
NAGAOKA Ryusaku

かつてゴンブリッヂは著名な論考「棒馬考」において、「表象」(representation) のふたつの意味（描写と代替）のうち、特に「代替」(substitute) への注意を喚起した。ゴンブリッヂによれば、すべての美術は代替物の創造に根ざしているが、「表象」に「描写」という意味が加わって以降、美術は現実の描写として理解されるようになった。「描写」を優先させる美術観を相対化するため、彼は棒馬(hobby horse)を取り上げる。馬の「代替物」としての棒馬は、乗用するための最低限の形を備えていればよい。この考察の中で、ゴンブリッヂが重視したのは、形よりも「乗ることができる」というその機能である。これを踏まえ、本発表では、「代替物」と「機能」というふたつの観点から美術を考える。

さて、「彼岸」とは「涅槃」と同義の、理想の境地を意味する用語である。『大智度論』は「到彼岸」の一章を設け（卷三十三）、彼岸に到る実践すなわち「六波羅蜜」について注釈を加えている。仏教美術は、この「六波羅蜜」の実践のために基本的に機能するとみるべきだが、それをより具体的に理解するには、『大智度論』が説く仏身觀を参照するのが有益である。『大智度論』卷二十九は法身と生身のふたつの仏身をあげ、前者を無相、後者を三十二相とする。また、卷九では「父母生身」として、生身を父母所生の仏身すなわち釈迦とする。『大智度論』において注目されるのは、生身の機能を明確に説く点である。卷九では「衆生の諸の罪報を受くる者を度する」存在として、卷二十九では「福德の因縁をもって衆生を引導する」存在として生身を位置づけている。すなわち生身とは、罪を減し、福德の因縁を生じさせることによって衆生を彼岸へと導く仏身ということになる。

いうまでもなく仏像は、仏身に等しいものではない。優填王思慕像の故事では、それはまさしく仏身の代替物である。『日本靈異記』においても、仏像は仏身と明確に区別された上で意味づけられている。また、本来境地を意味する「彼岸」は、そう称されることで景觀になぞらえられる。景觀が隠喻となり、彼岸が景觀として視覚化される契機がここにある。そして、阿弥陀信仰の隆盛にともない彼岸が極楽の代名詞になると、極楽もまた景觀として表現されることになる。

仏教美術の意義は、このように、観念の代替物、視覚的比喩という側面にあると認められる。また、生身には法身、彼岸には此岸という対概念があるように、二元的な枠組みを用いてその思想を説くことが仏教の基本である。したがって、仏教美術はまずこの枠組み中に理解される必要がある。本発表では、仏教美術を表象と位置づけた上で、古代日本と中世の事例を取り上げ、それぞれの表象の二元的な構造とそれらが宗教的実践中に果たす機能について検証する。